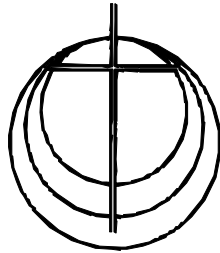


2022 年

# 信徒研修会講演・説教集

「中会65周年に向かって I  
～福音に根ざした、慰めの共同体」



日本キリスト改革派教会中部中会

日 時 2022 年 10 月 10 日(月・休)午前 9 時 50 分～午後 3 時 10 分

場 所 Zoom によるオンライン開催

# 〇〇 目次〇〇

講演Ⅰ：「中部中会設立65周年に向かって

—福音に根ざした、慰めの共同体としての中会の賜物と権能」

～金原義信教師(中会65周年委員会委員長・豊明教会牧師) ----- P.1

講演Ⅱ：「教会が教会であるためのディアコニアそして中会主義

—中会なくして教会なし・教会なくして中会なし—」

～相馬伸郎教師(中会65周年委員会委員・名古屋岩の上教会牧師) ----- P.9

派遣礼拝式

聖書：へブライ人への手紙 第13章20,21節

説教題：「主に送り出される」

～後登雅博教師(信徒研修会委員会委員長・高蔵寺教会牧師) ----- P.22

<付録>

「中部中会65周年記念事業検討委員会レポート」(2021年度第一回定期会可決)より抜粋

主題「福音に根ざした、慰めの共同体としての中会の賜物と権能」

～中会65周年記念事業検討委員会 ----- P.24

「中部中会設立65周年に向かって一福音に根ざした、慰めの共同体としての中会の賜物と権能」 ペトロの手紙一 5章8～11節

豊明教会 金原義信

## 1 はじめに

こうしてご一緒に信徒研修会に参加でき、感謝しています。今年と来年の2回の信徒研修会を中会65周年に向けた内容で行い、2024年に65周年の記念信徒大会を開催することになります。ですからその全体の中で、この第一講演はいわば「序・はじめに」の部分にあたります。今年と来年の信徒研修会を通して、65周年を迎える私たちの中会の歩みに、心を向けたいと願っています。

さて、中部中会は1959年4月に西部中会から分離して設立されました。10周年、25周年、40周年、50周年と記念事業が行われ、今度は2024年の65周年に記念事業が行われようとしています。中会では、2018年4月の定期中会で「65周年記念事業検討委員会」を設置して具体的な準備を始めました。その後担当委員会は「65周年記念事業企画委員会」、さらに「65周年委員会」へと名称と役割が変わって引き継がれ、メンバーも一部変更されながら、準備を進めています。その間中会議員による懇談会を何度か行いました。その過程で2021年4月の定期中会で、中会65周年課題検討委員会から課題検討レポートが中会会議に提出されました。その課題レポートにつけられたタイトルが「福音に根ざした、慰めの共同体としての中会の賜物と権能」です。これが今回の信徒研修会のテーマとなっているわけです。そして昨年2021年11月の定期中会で、65周年記念事業として次の4つを行うことを決めました。①記念信徒大会開催、②記念宣言作成、③教会の言葉、④記念誌作成、です。

## 2 50周年を振り返る

ここで、50周年を振り返ってみたいと思います。私自身は2015年に豊明教会に赴任しましたので、その場にはおりませんでした。40周年も同じです。ですから私にとっては当時の資料を読み、周囲の方々、先生方から教えていただきながら学んだこととお話することになります。ここには50周年当時おられた方々も、私と同じようにまだその当時中部中会におられなかった方々もおられることと思います。私の貧しい知識を通してではありますが、50周年のことをご一緒に共有できればと思います。

50周年につきましては、「日本キリスト改革派教会中部中会 設立50周年記念誌」と「2009 日本キリスト改革派教会 中部中会 設立50周年記念信徒大会記録」(2009年9月21日(月)～22日(火)に名古屋港湾会館で開催された信徒大会の記録)、この2冊がおもな資料となります。個人でお持ちの方々もおられるでしょうし、各教会・伝道所にはあると思います。今回改めて読ませていただき、本当に豊かな資料が残されていると思いました。またそこから伝わってくる信仰的な熱心を強く感じました。

50周年のときの主題は端的に言って「教会のしるしである説教と礼典に集中する」ということでした。それは礼拝の生命力の回復ということであり、教会の原点に立ち返るこ

とでもありました。その背景にある問題意識は、二つのことがあります。一つは「伝道の停滞」、もうひとつは中会内の諸教会に起こった試練に直面し対処きたこと、です。

一つ目の「伝道の停滞」については以下の文章を引用します。

「さて、ご承知のように、伝道の停滞ということが私たちの教会の大きな課題です。それをどうやって克服して行くか、どのようにすれば、伝道を伸展させ、教勢の回復に努めて行けるのか、それこそが課題であり、委員会が第一に考えたことでした。そして委員会が出した結論は、一言で言えば、教会のしるしに集中するということでした。教会のしるしに集中することによって、この課題を克服して行きたいと考えたのです。教会のしるしに集中するというのは、要するに、礼拝の生命力の回復ということなのです。それが、中会を建て上げていく大きな力になる、と焦点を絞りました。」（「設立50年記念誌」62ページ）。

もう一つの問題意識については以下の文章を引用します。

「そして、その緊張感を持った証人としての奉仕が、教会の言葉の作成の消極的な意義です。それはどういうことかと申しますと、わたしたちの中会の全体としての教勢の停滞、減少というのは、こつこつ伝道に取り組んでいてなお減っているというだけではなく、教会の分裂や、教師の戒規問題や、さまざまな教会の試練にもその要因があるからです。特に40周年以後、いくつかの教会が経験した試練は、中会会議記録や略報等でお伝えしてきた通りです。・・・中会会議はその都度、特命委員会を設置してこれらに全力で取り組み、悔い改めを明らかにし、罪を取り除く努力を重ねてきました。中会会議は、その意味では誠実に機能してきましたし、何事もなかったかのように問題をうやむやにすることはありませんでした。・・・」（「設立50周年記念信徒大会記録」20ページ 基調講演）

これは教会の言葉の意義を語る文脈の中で語られた言葉です。

このように50周年では、おもに二つの問題意識を背景に、説教と礼典に焦点を絞って宣言が作成されました。さらに教会の言葉が作成され、互いに分かち合われました。このようにして中部中会は、50周年以降を歩み始めたのです。

### 3 50周年から65周年へ——その間にある課題

#### \*説教と礼典を巡って

まず中会として自らを省みる必要があるのは、50周年で謳われた説教と礼典、とりわけ説教への取り組みはどうだったか、という点です。これは特に説教者が自らの神学的戦いを省みなければならぬ事柄です。そしてそれぞれの教会の礼拝の生命力の回復、そこから伝道へということなのです。勿論それぞれの教会、そして教師、信徒皆で取り組んできた事柄ではあります。しかしまだ途上であって、65周年以降もその戦いを続けなければなりません。さらに掘り下げ、深め、祈りつつ取り組む必要があります。

#### \*現状を省みて

現状を省みる時に、まずひとつは教会の伝道の伸展、教勢という点ではいっそう厳しい状況にあることを認めざるを得ないということがあります。さらにもうひとつは、各個教会のみで処理するのではなく、中会が公的な形で関わらざるを得ない案件が50周年以降もあったということもあります。中会内のひとつの枝の苦しみ、その枝だけで終わらな

い全体の苦しみともなりました。中会はそれを全体で担い、互いに配慮し合おうとしてきたのです。このことは、中会全体がキリストに結ばれたひとつの群れであることを証しするものでもあります。したがって一つの教会の回復や喜びもまた、中会全体の回復や喜びとなります。その意味では、50周年の時に意識した二つの中会的課題はなお継続して、むしろさらに現実味を増大した形で、私たちの前にあるといえるのではないのでしょうか。

### **\*なお継続する課題を見つめながら——教会共同体としての中会形成の必要性**

65周年課題検討委員会がそこで強く意識した問題は、ひとつの教会共同体としての中会、という課題です。中会の中には、弱さを覚えている群れや問題を抱えている群れもあるでしょう。それぞれが孤立感を募らせることなく、お互いに共に学び、祈り合い、励まし合うということが進んで行っただろうか、ということです。生き生きとした礼拝と礼典の喜びに押し出された教会は、互いの諸教会に対して関心を持たずにはおれないはずです。社会への関心もまた同様です。中会相互の交わりという点からいうなら、教会は恵みを受けること、与えることの両方で成長します。その意味で、中会の霊的・有機的な結びつきや広がりをもさらに深め、強くすることが求められています。中会全体の結びつきが育つことは、各個教会が育てられることにもつながります。これは「中会は教会である」ということの実現、という課題です。「中会は教会である」という言葉は、中会設立40周年記念講演にあります。「1999 日本キリスト改革派教会 中部中会設立40周年記念信徒大会記録」16ページ)

#### 「[中会と各個教会]

すべての群れに、キリストの命があふれるため、中会の賜物と権能を、思慮深く用いさせてください。四十年のあいだ、中会の絆をつよめてきました。しかしなお道なかばです。兄弟教会のくるしみに、愛の配慮が届きませんでした。ひとつの群れが、全体の祈りと配慮によって、支えられますように。ひとつの群れの賜物が、全体の益となりますように。」

(「日本基督改革派中部中会設立四十周年記念宣言」)

またこの課題は、「日本基督改革派教会中部中会設立二十五周年記念宣言」の「(結語)」にも語られています(日本キリスト改革派教会中部中会 40周年記念誌193ページ)。

65周年に向けて、私たちは今一度、この「道なかば」の課題に、今の時代に改めて取り組みたいと願っています。そのために中会という教会共同体をどうとらえるのかを、今の私たちの言葉でとらえ直し、語りなおすことができないだろうか。そう願って出てきたのが「福音に根ざした、慰めの共同体としての中会の賜物と権能」という課題検討レポートのタイトルだったのです。(私自身は「今の私たちの言葉でとらえ直し、語りなおす」ということがそう簡単でないことを痛感させられているところです)。

65周年に向けてもうひとつ意識したことがあります。50周年では具体的な個々の課題を考えつつも、説教と礼典に絞って語られました。65周年では、個々の中部中会の具

体的な課題も挙げて、それらの固有の問題をも論じ、65周年以降取り組みたいということです。ただし、それらは説教と礼典に取り組みつつ、そのことと無関係なことではなく、結びついた事柄として、取り組む課題です。

#### 4 50周年以降の中会の出来事を振り返る

次に50周年以降の中会の出来事を振り返り、中会全体の大きな流れを共有したいと思います。たくさんの出来事がありましたので、その全部を挙げることはできませんが、課題検討レポートが挙げた中からいくつかをご紹介します。ただ、この時間は全体的・総論的なこととお話したいと考えていますので、それぞれの詳しい経緯や現状、そして評価・問題点さらに今後の見通し等については入っていくことはしません。

- ① 日韓開拓伝道が開始された。
- ② 東日本大震災によって執事的愛の働きに新たな視点（ディアコニア）が与えられ、展開しつつある。
- ③ 伝道所の教会設立があり、さらに新たに教会設立を目指す伝道所が与えられている。
- ④ 教会の伝道所への種別変更、伝道所の閉鎖があった。
- ⑤ 必要に応じて教会・伝道所への配慮が行われた。配慮委員会が設置された事例も複数回あるが、配慮委員会を設置せずに議長書記団・関係委員会で対応したケースもあった。

#### 5 65周年の課題・各論

次に課題検討委員会が挙げた今後の課題をご紹介します。これも各項目に詳しく入っていきませんが、こんな課題があるという全体のイメージを持っていただければ良いと思います。

- 1 中会の一致に向けて
  - 2 教会と中会についての神学的な捉え直し。見直しと具体的方策を建てること。
- ① 教勢の停滞
  - ② 高齢化：高齢信徒の信仰が活きる教会へ
  - 3 日曜学校、青少年への信仰教育・信仰継承・伝道
  - 4 中会の教育力の回復
  - 5 世に仕える教会（対外的ディアコニア）
  - 6 定住の牧者を欠く教会・伝道所をどう支えるか
  - 7 これらを踏まえた新しい教会像の必要性
  - 8 中会内の各教会・伝道所相互の支え合う聖徒の交わりについて、神学的仕組みを考え構築すること。
- ① より小さな地域ごとの支援・協力・交流の体制を考えていく。
  - ② 地区を越えて伝道の賜物を分かち合う
  - ③ オンラインによる交わりの可能性と限界
  - ④ 65周年以降に会堂建築が必要な教会・伝道所への支援

- 9 日韓の今後の協力・交流について
- 10 教師の交わり・相互訓練の強化
- 11 コロナ禍における教会の再発見

これらのほとんどはこれまでもあったことです。こうした課題を一緒に認識することはとても有意義なことだと思います。これらの課題に取り組む時に大切なことは、中会全体が福音に生かされ、慰めの共同体として歩んでいることです。その土台となるのが、50周年で立ち返った説教と礼典です。キリストが私たちのために苦難を担い、十字架と復活の贖いを成し遂げてくださいました。私たちは罪を赦され、新しい命に生きる者とされたのです。そのために神の御子がへりくだり、僕として仕えてくださいました。このキリストの愛に動かされてはじめて私たちは互いに仕え合い、支え合うことができるのです。そうやって中会の課題への取り組みに、キリストの愛が映し出されていきます。教会のあらゆる営みが、人間の支配ではなくキリストのご支配（キリストの愛のご支配）が実現することを目指して行われることがとても大切です。それが中会に与えられた賜物と権能が、「福音に根ざした慰めの共同体」形成のために用いられる道なのですから。そのときに重要な意味を持つのが、「中会は教会である」ことを実現するという、「道なかばの課題」ではないのでしょうか。そこで中会の一致と多様性について考えてみたいと思います。

## 6 中会の一致と多様性——「教会の言葉」とのかかわりで

### \*一致と多様性

「中会の一致」とか「中会がひとつの教会」と言いますが、何をもって一致するのでしょうか。私たちの教会には、創立宣言にありますとおり、「信仰告白、教会政治、善き生活」という、明確は一致点があります。そのことを踏まえた上で考えたいと思います。中会をひとつの慰めの共同体としての教会としてとらえるということは、どのように考えたらよいのでしょうか。

「教会の一致」というときにもうひとつ大切なことがあります。それは「教会の多様性」です。「教会の一致」というだけでは多様性が見落とされてしまいます。それでは「教会の一致、中会の一致」という議論そのものも、とても乱暴なものになってしまいます。それぞれの群れに多様性があるのです。先日委員会でこのことが話題になったとき、ひとりの委員がこう言われました。「それぞれの教会で背負っているものが違う」。この言葉がとても印象に残っています。私は「教会の多様性」というと、いろいろな個性があり、賜物の違いがある、ということを手すぐに思い浮かべます。しかし「背負っているもの」というとまた違った印象を持つことができ、イメージが深められるように思ったのです。長い教会の歴史を歩んで来た教会もあれば、比較的最近伝道を始めた教会もあります。数十人の礼拝をしている群れもあれば、小さな群れや、定住の牧者を呼ぶことが難しい中で励んでおられる群れもあります。多くの試練を経た群れ、あるいはなお試練・困難の中で心を痛めながら歩んでいる群れもあるでしょう。それぞれに固有の課題、苦労があります。まさにそれぞれが「背負っているもの」が違うのです。それぞれの教会が向き合っている課題、

具体的な信仰の戦いがあります。その群れに身を置いている人にしか分からないこともあるでしょう。語ることが難しいこともあるかもしれません。ですから他の教会の人がそれを理解するとか背負う、ことにはおのずと限界があることは認めざるを得ないと思います。

「中会がひとつの教会」だからといってむやみに立ち入ることは慎まなければならないこともあります。だから中会が公的に関わる時にはそれなりの中会的な手続きを踏んで行うのです。こうしたことを踏まえた上でなお、互いの教会に関心をもつこと、互いの苦労を「わたしたちの教会（中会）の事柄」として受け止めようとするのがとても大切なことなのです。

#### \* 「教会の言葉」をめぐって

このように考えると、50周年で「教会の言葉」を作成したことの意味もまた改めて浮かび上がってくるのではないかと思います。50周年記念誌に、このような形で残されていることは、中部中会のひとつの貴重な財産だと思います。今回改めて一気に読ませていただきました。どの教会も、伝道開始からの歴史を簡潔に紹介した上で、50周年に作成した教会の言葉を短い文章で記しています。写真もあります。「教会の言葉」で何がなされているのでしょうか。私は二つのことがあると思いました。

ひとつは、伝道開始から教会の歴史をたどり、50周年の時点で、自分たちが今どこに立っているのか、という時間軸での立ち位置を確認しているということです。

もうひとつは、その立ち位置から、今度は50周年以降という将来に向かってどんな歩みを志しているか、ということです。

それは先ほどの言葉でいえば、これまで背負ってきたものを振り返り、そして未来に向かって何を背負っていく歩みを見ているか、ということです。「背負っているもの」は、神様からどんな課題・信仰と教会形成の戦いを担うように召されているか、と言い換えることが出来るでしょう。それをそれぞれの教会が自らを省みて見つめ直した、そういう作業をしたのだと思います。それは同時に、その信仰の歩みの中で、主がどのようにその教会に働いてくださり、導いてくださったかを省みることでもあります。ですから中会の一致と多様性、特に多様性を考えるときに、この「教会の言葉」は欠かすことの出来ない大切な意味を持っているといえるでしょう。私自身は、「教会の言葉」がもっている意味の大きさに改めて気づかされました。

委員会では65周年でも「教会の言葉をやろう」ということになりました。50周年から15年を経て、その間を振り返り、どのような歩みをしてきたかを振り返り、そこで与えられた主の憐れみ・恵みを見つめるのです。そしてこれからどのような信仰と教会形成の戦いを担うように召されているのか、どのように主の福音に応答しようとするのかを、それぞれに考えるのです。それは自分たちが歴史の中で、神様の前でどこに立っているのかを見つめることにもなると思います。どんな課題に向き合って来たか、担って来た苦悩や信仰の戦いがあります。そういうことを踏まえて書くということになるでしょう。勿論何もかも具体的に書くことができるわけではないでしょうけれど。ですから教会の言葉は50周年以降の実績発表ではないと思います。見栄えを良くする必要はありません。な



ぜなら弱さにおいても主の恵みの御手は私たちを見捨てることはないからです。主は働いてくださったはずです。そして「教会の言葉」の核心部分は、やはり神様がどのように自分たちを顧みてくださってきたかという、神の恵みを証しすることではないでしょうか。

### **\*教会に与えられた福音の恵み**

豊明教会では先日ペトロの手紙一の連続講解説教を終えました。著者は使徒ペトロと理解して学びました。この手紙の受け取り手は1章1節に記されている地域に離散している諸教会です。Iペトロは迫害を背景にして、危機の中にある諸教会を励ますために書かれた手紙です。この手紙でペトロは、迫害という試練が迫る中で、ひたすら福音を語りました。キリストの復活により与えられた新しい命、そして朽ちず、汚れず、しばむことのない財産を受け継ぐ者とされた幸いを語ります。そして今の苦難が、永遠という神の物差しから見れば、「今しばらくの間」であることを示します。さらに私たちのために主がどんなにへりくだり、十字架と復活の救いに私たちを与らせてくださったかということが語られています。この福音に生かされてキリストの苦難にあずかり、僕として生きる道を示しました。さらに5章では、目を覚まして悪魔に抵抗するように勧めます。主が、しばらくの間苦しんだ教会と信徒に約束された恵みを語って励ますのです。

私はこの手紙を読みながら、ペトロに与えられた主の憐れみを思わされました。ペトロと言えば思い起こすのは、彼が自分とイエス様との関わりを三度も否定してしまったことです。しかしそのつまずきを予告されたとき、イエス様はペトロに「しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」(ルカ22:32)と言われました。この手紙を読むと、ペトロはまさにイエス様の御言葉通りに、立ち直って兄弟たちを励ましているのを見ることができます。さらにもうひとつ、ペトロはこの手紙で「身を慎んで目を覚ましていなさい」(Iペトロ5:8)と勧めています。ここでも思い起こすのは、あのゲッセマネの祈りの時に、ペトロは目を覚ましていることができず、眠ってしまったことです。そのときペトロにイエス様が言われた言葉が「あなたがたはこのように、わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい」(マタイ26:40~41)。重大な危機の中でイエス様が苦しみながら祈っておられる時に、目を覚ましていられなかったペトロです。キリストを見つめることも、したがって危機に向き合うことも出来ず眠ってしまったその彼が、ここでは諸教会の信徒に、「目を覚ましていなさい」と勧めるようになっていくのです。これはすごいことだと思いました。ペトロ自身には、このようなことを言う力も資格もありません。ここには、ペトロを主の弟子として立ち直らせ、危機の中にある教会を福音によって励ます器として立たせて下さる、キリストの恵みがあります。それはキリストの十字架と復活の贖いによる罪の赦しと新しい命の恵みです。この恵みを受けてペトロは、危機の中にある教会に、福音による慰めを語っているのです。それ以外にペトロが立つ場所はありません。驚くべき主の憐れみです。

### **\*多様性から一致へ**

この手紙を受け取った諸教会のことは、その教勢とか、それぞれの教会の内情などは分

かりません。でもそれぞれに個性があり、背負っているものが違う、という私たち中会の諸教会と同じように、多様性があったと考えることは許されると思います。それらの諸教会を生かしているのは、ペトロを立ち直らせたのと同じ、ペトロが主から受けたのと同じ福音の恵みです。これは同じです。ここに諸教会の一致を見ることができます。

## 7 65周年に向けて

教会の言葉からそれぞれの多様性を私たちは見ることができます。その多様性の中に、どの教会も、ペトロが受け取ったのと同じ主の福音に依り頼んで生きる姿が証しされ、浮き彫りになるとき、私たちはそこに「ひとつの福音共同体として中部中会」の姿を見ることになるでしょう。主が与えてくださった一致です。多様性を、信仰をもって丁寧に見つめる時、そこに一致も見えてきます。その意味で多様性と一致はひとつです。どの教会も、キリストの苦難にあずかる大切な枝として互いに関心を持ち、尊重しあう中会の姿です。そこから互いのために祈り、重荷を負い合う、必要な助け合いの具体的な方策を考えて形にしていく作業が始まるのではないのでしょうか。この信仰の志を共にする65周年にしたいと思います。祈ります。

### 祈り

主イエス・キリストの父なる神様、この信徒研修会を感謝します。あなたは土の器に過ぎない私たちに、尽きることのない福音の恵みを託してくださいました。主よ、どうぞ中部中会に豊かな恵みを注いでください。皆が共に喜んであなたにお仕えする65周年へと、私たちをお導きください。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

# 「教会が教会であるためのディアコニアそして中会主義

－中会なくして教会なし・教会なくして中会なし－

中部中会信徒研修会 第二講演  
相馬伸郎

## 序

私は、牧師として生きてまいりまして、いつも歴史への責任ということを考えて参りました。教会とは、歴史を形成する共同体であると信じているからであります。歴史を作るとは、時間の経過にただ身を任すことではありません。歴史に働きかけようとすることにあります。もとより、歴史の主は神ご自身でいらっしゃいます。私どもは単なる神の器に過ぎません。ですから、教会はいつでも自分たちの計画通りに進むわけではないことをわきまえております。しかし、驚くべきことに神は、その壊れやすい土の器を憐れんでご自身の栄光の器として御国の建設のために用いてくださることを信じています。

そもそも、日本キリスト改革派教会は創立宣言をもって出発致しました。つまり、歴史形成の主体であるという自覚、歴史をつくろうと言う強い自覚を持つ教会です。その伝統は、10年を節目にするようにして出される信仰のことば、神学的宣言に示されているだろうと思います。私どもは信仰を告白する教会、信仰を言語化する教会なのです。ただし、だからこそ最も鋭く自分たちに問われることがあります。それは、どれほど美しく整った文章を編むことができたとしても、それを具現しようと心を一つに取り組むことがなければ、「言葉を殺す」という最も深い罪を犯すことになるということです。「言葉に誠実になること」これこそ、神のみ言葉で生きる改革派教会にとって決定的に求められている姿勢だろうと思います。

## I 「各個教会のことば」と「中部中会 65 周年宣言

### (1) 各個教会 15 年の歩みの検証

－告白する教会の責任－

私の個人的な思いで恐縮ですが、前回の 50 周年のとき、最も素晴らしかったことは、すべての群れが自分たちで教会の宣言「教会のことば」を編んだことでした。それぞれの群れが、壇上でそれを朗読しました。お互いにその言葉を確認しあい、励まし合い、誓い合ったのです。私は、65 周年のときにもそれぞれの「教会のことば」を最も楽しみにしています。

その準備のために先ず、要になることがあるだろうと思います。それは、自分たちの責任の下に告白した言葉から 10 年余りの歩みを検証することです。私どもの教会は、1994 年から伝道を開始した 25 周年事業として記念誌を発行することを決議しています。実は、そのための歴史編纂委員会を組織して既に 4 年ほど経ちますが、今なお途上にあります。その編纂方針の第一に掲げたことがあります。25 年の歩みを徹底的に検証して、悔い改めるべき事柄があればそれを明瞭にすることでした。確かに、高い目標を掲げただけに委員会は苦しんでいらっしやいます。しかし私自身は、実はその作業そのものこそ明日の名古屋岩の上教会を導くものとなるだろうと期待しています。そして、この 25 年余りの歴史を検証するための決定的な物差しとなるのが、まさに、50 周年記念の時に告白した「教会の言葉」に他なりません。今からの 2 年間、各個教会で責任をもって公にしたその言葉を、お互いに改めて確認しあうことは、率直に申しますと極めて厳しいことかもしれません。しかし、私どもの明日の教会を展望するためには不可欠な作業だろうと思います。

## (2) 中部中会 50 周年記念宣言の検証

### — 伝統へのたてこもり? —

それなら中部中会は何を、どうすべきでしょうか。先ずは、中会 50 周年宣言を検証することが必要となるはずですが、丁寧な議論は、添付資料として中部中会 65 周年課題検討委員会が中会会議に提出して受け入れられたレポートにお譲りいたします。私自身は一言で言えば、50 周年宣言は、改革派伝統にいわば立てこもってしまったのではないか、そのように思っています。その結果、内向きで自己満足的な教会の姿勢を露呈することとなったのではないのでしょうか。もとより私自身も中会の議員のひとりとして責任が問われます。レポートにはこのような言葉があります。中部中会が置かれている現実をまさに象徴的に示す言葉だと思われます。「60 周年に記念事業を行うことができず、65 周年になったことにも中会の課題があらわれているといわねばならない。」

## II 中会なくして教会なし・教会なくして中会なし

さて、ここからは、それなら私どもは 65 周年以降の少なくとも 10 年間、どのような教会生活、奉仕に生きて行くべきかについて、ご一緒に思いを巡らしたいと思います。

## (1)「中会なくして教会なし」 —名古屋岩の上教会加入の神学的動機—

思えば 25 年前、私ども名古屋岩の上教会が中部中会に加入する 2 年程前から週報やら学び会などで、何度もこのような言葉を連呼していました。

「中会なくして教会なし」あるいは、このようにも申しました。「中会が教会である」つまり「単立教会の私たちは言わば教会未満なのですよ」ということです。中会こそが、各個教会の教会性、使徒的公同的な教会であることを担保することができるというものです。ですから仮にどれほど単立教会としていわゆる教勢的にぐんぐん成長したとしても、それは聖書から言えば、いびつなあり方だと、このままではずばり教会未満なのだ、開拓伝道の真っ最中に言い続けたのであります。思えば、加入を実現するということは、私どもにとって大変なハードルでした。

一方で、中部中会に属する少なくない教会は、実は、旧日本キリスト教会時代の歴史を持っていました。つまり敗戦後、政府によって統合させられていた日本基督教団からそれぞれに日本キリスト改革派教会に加入したのです。ただし問われることがあるだろうと思います。「このままでは自分たちは、まっとうな聖書的教会になれないのだ」といういわば切羽詰まったような神学的自覚がどれほどあったのでしょうか。「長老主義政治なしに教会の自律、教会の健全な形成はかなわないのだ」という神学的確信がどれほどあったのでしょうか。もしかするとここが、今なお、問われるべき点ではないか、そのように思っています。

## (2)教会と中会についての神学的とらえ直し —車輪とフレームの関係—

今回の講演の副題として「中会なくして教会なし・教会なくして中会なし」とさせて頂きました。それは、添付資料の課題検討レポートの 2 としてこうあるからです。「2 教会と中会についての神学的な捉え直し。見直しと具体的方策を建てること。」

この「中会なくして教会なし」とは、中会が各個教会の母胎であるということ。「中会は教会である」ということです。つまり、中部中会は一つの大きな教会、私どもにとっての一つの全体教会ということ。それゆえに、各個教会、伝道所は、中部中会との交わりなしに本来、成立しえないということです。

次の「教会なくして中会なし」の方は、おそらく感覚的に分かりやすいだろうと思います。事実として、各個教会、伝道所なしには中会は成り立たないからです。教会と中会との二つの相互関係について神学的にきちんと

と理解すること、そして「我は教会を信じる」と言うように信じることが大切だろうと思います。私自身は、ここに中部中会の課題の急所があると、最初から今に至るまで考えてまいりました。そしてそれは、おそらく日本における長老主義教会を標榜するすべての教会の根本的課題なのだろうと考えています。

わたしはかつてこの集いで自転車のたとえ、自転車のフレームと車輪になぞらえてお話させていただいたことがあります。各個教会を意味する車輪、後輪を安定して前に進めるためには、言い換えればこの世界に神の国を伸展させる、救いの歴史を形成するためには、しっかりとしたフレームと前輪が必要なのです。このフレームが中会です。この中会に繋がっていないければ、一輪車のようにふらふらしてしまうわけです。中会とは、教会を教会たらしめる力、各個教会を正しく持続的に回転させる務めと賜物、そして権能が与えられています。それをどのように発揮させられるのか、ここが急所、問われている課題だと思います。そして、結論的に申しますなら、長老主義教会、言葉をかえれば中会主義の究極の目的とは、各個教会、伝道所の健やかな形成とその前進に奉仕することにこそあるのであります。レポートでは、「具体的な方策を建てること」とあります。しかしその前に、先ずは神学的な筋道を確認したいと思います。今回の発題は、皆様と共に、教会である中部中会を建て上げるその原動力、その道筋に、何が必要になるのか、あるいは何が不足していたのか、それらについて思いを巡らしてみたいと願っています。

### **(3)一致（中会）と多様性（諸教会・伝道所） 諸教会と中会との関係性**

確かに、自転車のたとえは、一つの各個教会と中会とのかかわりにおいては機能すると思います。しかし、24の諸教会と一つの中会とのかかわりをあらかずことはできません。そんな奇妙な自転車は見たことがありません。その意味で、今回は各個教会と中会との関係性を一つのしかし本質的に重要な言葉でとらえてみたいと思います。それは「一致と多様性」です。簡単に言えば、中部中会という教会にとって決定的に強調しなければならない、その特徴、本質は一致です。諸教会、伝道所が「一つ信仰告白」と「一つ教会政治」と「一つ善き生活」とによって、聖霊の絆によってがちり結ばれていることが大切です。

同時に、そこで見失われてはならないことがあります。それが多様性です。中会の車輪は24あります。その車輪の一つひとつに豊かな多様性が

現れています。そもそも、それぞれの教会には固有の歴史があります。おかれた場所が異なります。今第一に取り組むべき課題は、それぞれ異なっているはずで、その意味で、一つひとつの群れには個性が与えられているだろうと思います。そして、それこそが中部中会の宝物なのです。

教会における一致と多様性について、もっともイメージ豊かに描いたのはやはりコリントの信徒への手紙Ⅰ第12章のパウロの議論だと思います。そこには、第一に聖霊の賜物について、第二に、キリストの体である教会について記されています。

第一の聖霊なる神の賜物について、パウロは4節からその多様性について描き出しています。「賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。」云々と続きます。教会員には様々な賜物が与えられています。さまざまな固有の務めも与えられています。教師、長老、執事、伝道所委員を考えることができると思います。また、教会の働きもあの自転車の車輪のたとえではありませんが、礼拝、伝道、教育、ディアコニアと言う基本の他にも無数に出て来るかと思えます。しかし、パウロはこう結ぶのです。「これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きである。そして「一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです」つまり、多様な働きと賜物とは、その人本人のために用いられるのではなく、他の教会員のため、全体の益になるために用いられるべきものなのであります。

次に、パウロは教会をキリストの体になぞらえます。17節「もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか。」皆が目では困ります。鼻であつても困ります。聖霊なる神ご自身が体の器官を繋ぎ合わせて下さいます。体は一つですが、多くの器官が必要なのです。体は一つ、しかし、器官、肢体は複数なのです。ここに教会の一致と多様性を見ることができます。

中部中会は一つの体です。それを今、24の群れ群れが織りなしています。その中会自身は、一つの器官、つまり各個教会の形成と成長のために尽力するためにあります。同時に、一つの器官である教会自身は、その固有の、個性的な働きを通して中部中会を支え、建て上げて行くのであります。ここに聖霊による健やかな関係性があります。つまり、これから頑張つて絆を結んで行きましょうというではありません。それぞれの教会と教会の

間に聖霊が働いていて下さり、絆を既に結んでいて下さるのです。ですから、この聖霊のお働きを信じるところからしか始まりません。いよいよこの聖霊の現実を自覚的に認めること、そして具体的な方策をもって具現すること、これが私どもに与えられた課題に他なりません。

#### (4)教会の「果敢なる進軍」をはかる指標とは

##### 教会形成の本質（キリストの主権の確立）

さて、横道にそれます。そもそも教会の前進とか成長とは、どのような姿なのでしょう。ちなみに創立宣言は、「我が教会が～果敢なる進軍を遂げることこそ」日本に生きる人々への最高の愛の表現なのだと言いました。ここで言われている「果敢なる進軍」のイメージは大切だろうと思います。いったい教会が前進すること、成長するということはいかなることなのでしょう。おそらく多くの方が、いわゆる教勢の伸長、拡大にそれを見るのではないのでしょうか。要するに人数の問題です。会員の多い教会となることだろうと思います。

かつて経済成長著しい日本にあって、日本キリスト改革派教会もまたさまざまな伝道プランが大会において示されました。それに呼応するように中会の伝道もなされたと言う側面があります。たとえば「太平洋ベルト地帯」への開拓伝道です。人口が急増し、工業を中心とした経済が活発化する地帯に教会をつくりましょうということでした。それはまさに時代の波、あるいは時代の霊に教会が乗ったという側面がないのでしょうか。それは先輩たちへの批判に留まりません。むしろ今日の私どももまた同じような間違いを犯していないかということなのです。昔はこのような呼びかけがなされました。「さあ、高度成長の時代です。太平洋ベルト地帯に開拓伝道しよう。」ところが今は、「ダウンサイジングの時代です。教会も小さくなるのは当然です。負担を減らし、統廃合して生き残る道を見出しましょう」と言うわけです。もとより、私どもは時代の中でしか生きられません。しかもそれらの議論がすべて悪だということでは決してありません。けれども、聖書と神学によって立つのではなく、この世の思考になびくなら、どうしてキリストの主権に服する教会、言い換えれば神の言葉に服す教会となりえるのでしょうか。私どもは真の教会をこの日本に建て上げるためにこそ日本キリスト改革派教会を創立したのです。あのとき、すべての教会が日本キリスト教団に統合され、ほんとうにわずかの教会が離脱し、この道こそ日本に純粋な教会、真の教会を建てる一本道だと宣言しました。ものすご



い逆風だったと思います。しかし、そのように信仰の狭い道、キリストだけを主と告白して歩もうとする教会だからこそ、聖霊の慰めもまた豊かに注がれていたと思うのです。慰めの共同体とは、お互いにキリストに従う生活を励まし合い、戒め合うところに聖霊が必ず実らせて下さるのです。日本キリスト改革派教会とは、御言葉によって絶えず改革される教会たらんと標榜して出発したのです。キリストの主権の確立、キリストの主権、福音の真理に徹底して従順になる教会の形成でなければ、私どもの存在価値、歴史的意義はないだろうと思っています。そして、キリストの支配が確立するというイメージは暖かなものです。冷たい感じはしないはずです。優しく温かい教会です。

### Ⅲ 教会が教会であるためのディアコニア

#### (1)ディアコニアの視座から見える教会と中会形成の本質

教会には必ずしなければならない務め、働きがあります。自転車のたとえで言えば、車輪の大きな軸として礼拝・伝道・教育そしてディアコニア（奉仕）です。これらはどれ一つとして、教会が教会となるため、教会が教会であるために欠くべからざる働きなのであります。私ども日本キリスト改革派教会は礼拝中心の教会です。カテキズム教育つまり徹底的に聖書の御言葉とその教えを学ぶ教会です。教育的伝道を得意とする堅実な教会と言ってまったく間違いがありません。そして私どものような伝統的、堅実な教会が今日、どれほど求められていることでしょうか。ただし、です。それならディアコニアに生きる教会の姿はいかがでしょうか。この場合のディアコニアとは、教会内の奉仕、執事的働きのことではありません。対外的愛の働き、教会の社会的責任のことです。

実は、信徒研修会では三回に渡ってディアコニアについて集中的に扱いました。しかしなお、ディアコニアの教会像は、大会は言うに及ばず、私ども中部中会にもしっかり根付いたとは言えないように思うのです。それなら何故、それほどまでに教会のディアコニアに注目すべきだと提唱するのでしょうか。それは、ディアコニアの視座、ディアコニアの神学から教会を絶えず見直すことが本質的に重要であるからです。そもそも、教会が成長するとはどういうことなのか、そもそも、正しい伝道とはどのようなものなのか、それらをきちんと掘り下げるために、決定的に不可欠な視座をディアコニア（奉仕、愛の働き）が、あるいはディアコニアの神学が与えてくれると考えているからであります。

## (2)小さく、貧しくなる教会      ディアコニアに生きる教会その神学

聖書に基づいて伝道の働きとその実りを考察するならば、救われる人が増えて行くことが神の約束であろうと思います。使徒言行録を素朴に読めば、どなたも納得されるはずで、それなら教会のディアコニアの働き、特に対外的ディアコニア、地域社会のためのディアコニアについて考えるならどうでしょうか。わたしの聖書理解では、福音宣教のようにそうすれば教勢が拡大する、人数が増えると言うことは必ずしも約束されてはいないと思っています。むしろ、ディアコニアの教会は、自分たちに与えられた物を、神から委託されたもの、お預かりした宝として受け止めます。そうであれば、それは決して自分たちの利益のための宝、財産とは思えなくさせられてしまいます。むしろ、神の栄光と隣人の祝福のために、分かち合いたくするように思わされてしまいます。つまり、ディアコニアの教会とは、人間の目から見れば、数値的に測れば、減って行く道なのです。伝道が拡大であればディアコニアは縮小です。増加に対して減少です。ディアコニアに生きる教会は、自分から隣人と共に生きるために隣人のために小さくなる道なのです。ディアコニアの教会の神学は、上昇して行く方向性ではなく降って行く教会像を示すものなのです。

## (3)分かち合うディアコニア      二匹の魚と五つのパンの奇跡

その典型的な実例が、有名な二匹の魚と五つのパンの奇跡の物語です。四つの福音書のすべてに記されています。これこそ正しく主イエスの奇跡の中の奇跡だということ、ここにこそ教会がなすべき働きの本質があるのだ、これを忘れるなど四人の著者たちが等しく確信したからだろうと思います。

ヨハネによる福音書第 6 章 5 節以下に基づけば、こうです。主イエスは、大勢の群衆が御自分の方へ来るのをご覧になられます。そしてフィリポに尋ねます。「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」フィリポはこのように答えました。「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分、200万円分のパンでも足りないでしょう」とすると、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、主イエスに情報を提供して言いました。「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」ここから、主イエスは5千人の給食の奇跡を起こされたのであります。

ひとりの少年のおそらくお弁当、彼の家族分のものだったのかもしれませんが。いずれにしろ、たった五つのパンとたった二匹の魚が、大群衆の前に差し出されます。主イエスは、これで5千人以上の大群衆の食事のおもてなしをなさいました。教会の対外的ディアニアとは正しくこの少年の行為にあります。自分のお弁当を分かち合うとき、そこに主イエスがおられるなら奇跡が起こります。教会のディアコニアもまた、第一に主イエスの為捧げられるのです。第二に、主の愛しておられる人々のために捧げられます。とりわけ主イエスが「ああ、かわいそうに」とはらわたを痛めるような思いに駆り立てられる、弱く小さくされた人々に捧げられます。そのとき、教会は自分の財を捧げます。その意味ではお金は減るのです。はっきり言えば、損するのです。しかし、そこにこそキリストの教会の本質があるのであります。確かにあのとき奇跡が起こりました。しかし、たとい今、同じ奇跡が起こらなくても、私どもはこの少年から常に問われるのではないのでしょうか。「あなたが神からいただいたもの、主から委託された宝物、授かった祝福を、あなたは、貧しくされた人々と分かち合いますか、それとも自分だけものとしますか。」それが問われるのであります。

もし教会がディアコニアに生きる教会を目指す理由、目的として、教勢を伸展させ、伝道を拡大させようとするのであれば、それは無理だろうと思います。と言うより、そもそもそれは教会のディアコニアになっていません。

#### **(4)被災地ディアコニアと政治的ディアコニア 神と隣人の為にある教会**

たとえば私どもは、伝道所の時代に被災地支援のディアコニアに多大な力を投入しました。大会、中部中会、海外から一千万円以上のお金をお預かりして、被災地支援の働きをさせて頂きました。しかし、それはあくまでもこの町の隣人となるのではなく宮城県、福島県の被災者の隣人となることでした。その意味で、どれほどそこで活動しても、名古屋岩の上教会じしんの教勢が伸展するはずがありません。しかし、浜松伝道所や私どもの被災地ディアコニアにご参加くださった方々は、おそらく主イエスとその福音の宝、いのちには豊かに共にあずかたのではないのでしょうか。少なくとも、主イエスをさらに深く知ることができたのではないのでしょうか。つまり主イエスの御苦しみにあずからせていただく特権にあずからせていただいたからであります。

さらに私どもの教会は、既に 2015 年から政治的ディアコニア室を立ち上げて政治によって弱くされた市民の隣人となろうとその働きを今日まで継続しています。毎月第二主日のお昼には国道の交差点でスタンディングを始めて 7 年になろうとしています。毎年、数回、憲法カフェを開催しています。今年は特に憲法動画を YouTube で作りました。地域の市民団体の皆さんもこの動画を利用して集会を開催して下さいました。私どもは本気でこの国を新しくしたい、この国の空気を入れ換えたいと願っているのです。しかし、もしもどなたから、「それで伝道になりますか、地域の人々が礼拝式に集われますか、市民運動家がキリスト者になったかと問われれば」、ただちに「いいえ」とお答えします。私どもは、この時代の空気に抗うのです。「ここに教会は立っています」と、教会の姿を見せるのです。言わば、見える教会として存在したいのです。ただしそのために、いわゆる人を集める伝道の真逆の働きになっていることを自覚しています。いわゆる伝道の妨げになっているかもしれません。しかし、真理に立つということはそういうことだと、言わば、腹をくくっているわけであります。

中部中会 50 周年宣言では、言わば、「すべてを伝道に」という方向性でした。私は、それに対抗するようにして「すべてをディアコニアに」などと言うつもりは毛頭ありません。むしろ、それは別な形でいびつな教会にしてしまうだけです。しかし、これは、いささか単純化しすぎかもしれませんが、聖書から見ると、伝道の働きが教会を大きくする方向性にあるとすれば、ディアコニアの方向性とは、小さくなる方向性なのです。そしてそこに、私どもの教会を新しくする道、改革される道、原理があると信じます。

#### **(5)ディアコニアの見返りとしてのコイノニア（交わり・共同体の再生）**

今の議論を裏切るように聴こえるかもしれません。実は、教会のディアコニアは大きな「見返り」があります。この見返りをきちんと求めてよいのです。むしろこの見返りがなければ、教会のディアコニアとしては未熟であると言ってもかまいません。それは、ディアコニアがなされたら、そこに交わり・コイノニアという実りが得られると言うことです。教会のディアコニアは人格的出会い、人と人との交わり、絆が起こることです。連帯が生じるのです。確かに、あの少年のように自分のお弁当をなくしてしまいます。自分の所有権を放棄します。しかし、イエスさまを真ん中にして、みんなと分かち合っ、みんなと喜びを分かち合うことができるので

す。つまり、靈的にはいよいよ豊かにされる原理、その道がディアコニアなのです。

対外的ディアコニアに生きるなら、この世と異質な原理で生きることになるだろうと思います。しかし、そもそも教会とは、この世のど真ん中にありながら、この世と異質な原理で集められる共同体なのです。だからこそ、神の国を地上に映し出せるのであります。ちなみに、大会の70周年記念宣言には、「ディアコニアは教会の本質を成す」と表明されています。言葉を殺してはならないと思う者であります。例えば、浜松伝道所を中心としたお便りディアコニアがそうです。単なる物資支援だけではなくお便りという人格的な交わりを求めてなされたのだろうと思います。

#### IV 各個教会を支える中会（長老）主義とディアコニアの本質 (1)中会の責任

今回のお話は、各論としての教会のディアコニアを中心にして、思いを巡らして参りました。私自身の考える総論とは、中部中会全体を健康にする筋道は中会主義、長老政治に込められた賜物、その靈的権能を豊かに行使すること、ひとえにここにかかっていると考えています。しかし、その賜物や権能がより正しく、より豊かになされるためには、教会の本質をなすディアコニアが不可欠なのです。愛の働き、愛によって仕える業とその神学が、その原動力となり実践の筋道となり、目指すべき方向となるのであります。

ディアコニアの視座、神学から見えて来る中会主義のイメージとはどのようなものとなるでしょうか。それは決して、上から下へのトップダウンのようなあり様ではなく、降りて来て、共に歩んでもらえるというイメージ。何か叱られるのではないか、譴責されてしまうのではないか、どきどきさせられるイメージではありません。つまり、中会は、ひとえに各個教会を支える方向に向かうべきものだということでもあります。決して、中会という言葉が中央、中心が大きくなる方向性にはありません。各個教会がどんな困難に陥っても、しかしそこでしっかりと御言葉に踏みとどまれるように中部中会が励ましてくれる、他の教会の仲間たちの存在と奉仕が励ましてくれる、それこそがディアコニアの心を身に付けた中会主義の温かく優しいイメージです。

中部中会に連なるその尖端、中会を中会たらしめている地域教会、伝道所に奉仕するシステム、制度それこそが中会、中会主義に他なりません。

私どもは、おそらく中会主義とは何か、どのようにその賜物と権能を行使すべきか、これを 25 周年のときも 40 周年のときもさらに 50 周年のときも等しい課題として突きつけられてきたのだらうと思います。65 周年の今、新たな教会像を構築する契機となるべきディアコニアの神学と心、とりわけ対外的ディアコニア、弱くされている人の隣人となる神学実践から捉え直すことも極めて大切なことではないでしょうか。

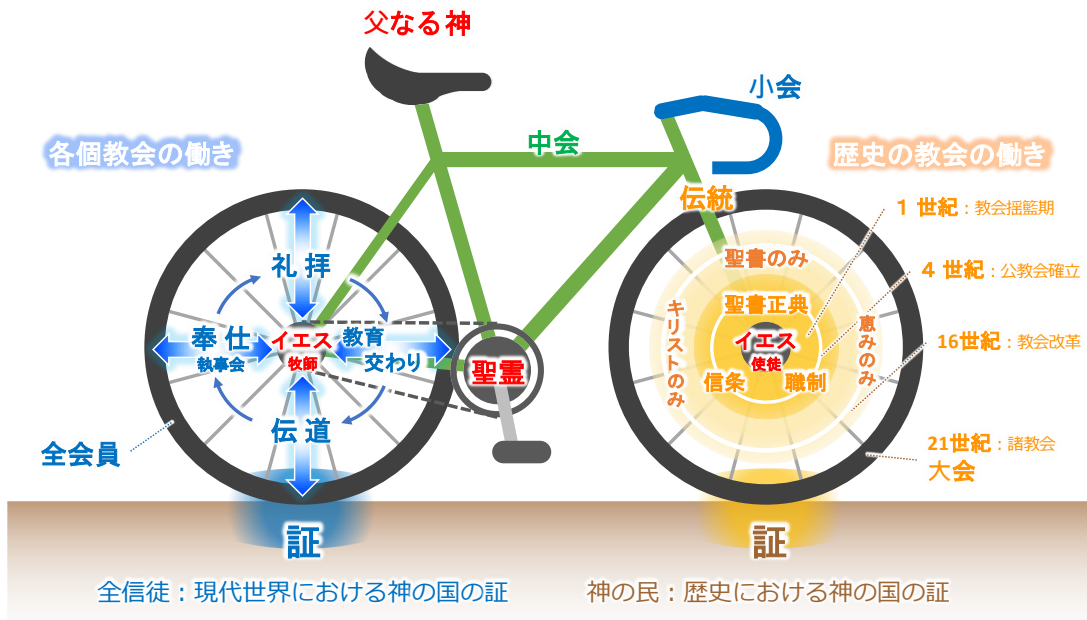
## (2)各個教会、伝道所の責任

最後に、「教会なくして中会なし」であります。したがって、それぞれの教会には責任があります。先ずあの「教会のことば」に誠実に向き合ひましょう。そして悔い改めと希望と感謝をもって新しい「教会の言葉」を紡いで参りましょう。私自身は、一つひとつの群れが、それぞれにディアコニア（対外的愛の働き、社会的責任）への祈りと地域社会への展開のために真剣に学び、祈っていただきたいと願っています。その歩みの中で、きっと、それぞれの教会がその個性つまり多様性を発揮されるだらうと思うからです。そして正にそのとき、ディアコニアはコイノニア、聖徒の交わりを生みます。その結果、長老主義政治が目指す事柄、つまり、真実のキリスト者のコイノニア、教会共同体を育むことと重なるはずです。

具体的には近隣教会どうしの豊かな交わりも生まれるだらうと思います。ネットを用いれば地域を越えての協力関係、支援関係も可能になるとも思っています。実に、ディアコニアに生きる教会の形成は、中会主義の本質をなすものでありそのスピリットと重なるのであります。これからの 10 年、中会主義、長老主義の強みを何としても機能させたいと願います。ひとえに「ここに神の教会、ここにキリストだけを主と告白する慰めの共同体を形成する」こと、この一事を実現させるためであります。そのために、それぞれの教会において教会のディアコニアの学びを継続し、掘り下げ、地域社会への展開を祈り求めて行かれますようにと心からお勧めして終わります。

Soli Deo Gloria !

神の国の歴史を導く父・子・聖霊と仕える教会のイラスト  
 各個教会の働きと中会他の働きとの関係性のイラスト



派遣礼拝ですので、礼拝の祝福で引用されることも多いヘブライ人への手紙を選びました。私たちは今日、中部中会信徒研修会に集まってきました。研修会ですが、今日のプログラム全体が礼拝であったと受け止めたいのです。

私たちは主の名によって集まってきました。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」(マタイ 18：20)とキリストは言われました。ですから、今日も主が私たちと共におられたと考えて良いのです。台風のために延期され、ネットを介しての集まりとなりました。場所は分かれています、主にあって思いは一つに集めて来ました。私たちを一つに結び合わせてくださった主は、祝福を持って私たちを送り出してくださいませ。

私たちを集め、送り出してくださいませる主とは如何なるお方でしょうか。：20に記されています。その方は、「平和の神」です。平和ということ私たちが今、つくづく考えさせられているのではないのでしょうか。世界を見渡せば、あちらこちらで争いや迫害と呼ぶべきことが起こっているからです。

しかし今は、そのような争いのことを念頭に置いてお話しすることはしません。私が世界の情勢について語れることなどたかが知れていますし、皆さんの方がはるかに世界情勢について明るいはずだからです。そして何よりも、ここで語られる「平和の神」とは、第一義的には世界にある争いのことを考えて言われているとは思わないからです。

「平和の神」とは、神と私たちとの間にあった争いを終わらせてくださった神のことです。信徒研修会に参加しているほとんどの方が、キリストへの信仰を明らかにしておられることでしょう。まだ洗礼を受けていない方、あるいは信仰告白をしていないという方もおられます。しかしそれでも、ここにおられる全ての方がキリストの教会に繋がっているはずで、す。ですからすでに神の招きの中にあり、神の選びの中にあると考えて良いのです。もしそのように考えておられないなら、思い違いをしておられます。私たちは、キリストの名によって集まってきました。ここにいる私たちは、全員が中部中会に連なるキリストの教会、その枝とされています。

ですから、ここに集まっている私たちは、「平和の神」と言えば、神に敵対していた私のために、キリストを送ってくださった神であると知っているはずなのです。

この神は、神自らが御自身と私たちとの間にあった争いを取り除くために、キリストを送ってくださいました。キリストの血によって新しい契約が、神と私たちとの間で結ばれました。

私たちの神は、キリストを十字架に架けられましたが、それはこの方を死者の中から引き上げるためでした。こうしてキリストは死に渡されましたが、むしろ死の力を打ち破られました。そして、キリストに結び合わされている者たちのために罪の裁きを受けられただけでなく、もはや罪も死も支配することがないようにしてくださいました。キリストを死者の中から引き上げられた神は、私たちをも罪と支配の中から引き上げてくださったのです。こう



して平和の神自らが、御自身と私たちとの間から敵意を取り除いて、神と私たちとの間に平和をもたらしてくださいました。

キリストによって私たちを救うという恵みの御業を果たされた方は、今も私たちに働きかけておられます。御心にかなうことを私たちのためにしてくださいます。そのための必要も、この方が満たしてくださいます。

私たちに対する神の御心とは何でしょうか。様々なことが考えられますが、第一は私たちが神の子として生きることです。すなわち、キリストによる救いを感謝して生きることです。キリストの命と引き換えに私たちは神の子とされ、永遠の命を与えられました。この何ものにも代え難い恵みを失うことがないために、神が私たちに働きかけておられます。私たちが神の子として世にあって喜んで生きる時、最も神の御心にかなうのです。

私たちは今、それぞれ置かれている場所も状況も違います。しかし、今一緒に主を礼拝している全ての人が、神の御心に従って世に送り出されます。私たちはこの世にあって、神の子として喜んで生きるのです。そうして、神の栄光を表す者とされるのです。私たちはこの世の力、闇の支配の元にはありません。キリストの命によって引き上げられた神の子です。私たちがどこにいても、何をしても、神は私たちが喜びを持って生きるようにと願っておられます。キリストにある永遠の命を喜びながら、この世に向かって神の栄光を表していきましょう。恐れることはありません。そのための力は、神が与えてくださいます。キリストを死者の中から引き上げてくださった神の力が、私たちにも与えられています。私たちはキリストと同じように、もはや死の力に囚われてはおらず、復活の命に生かされているからです。

## ＜付録＞「中部中会 65 周年記念事業検討委員会レポート」

(2021 年度第一回定期会可決)より抜粋

### 主題「福音に根ざした、慰めの共同体としての中会の賜物と権能」

#### はじめに

中部中会 65 周年記念事業検討委員会に課せられた任務は実質的に中部中会 65 周年に向けた課題検討であった。検討結果をこのレポートにまとめたが、その主題を「福音に根ざした、慰めの共同体としての中会の賜物と権能」とした。それは以下のとおり 50 周年以降の回顧と現状認識から浮かび上がる諸課題を踏まえた問題意識を表現したものである。

#### I 50 周年以降の回顧と悔い改め

##### 1 中部中会 50 周年記念宣言とその実りについての評価・反省

###### (1) 50 周年記念宣言の背景と意図

50 周年記念宣言の意図については「設立 50 周年記念誌」に記載された「座談会パート 2」に記されているとおりであるが、一言で言うと、礼拝を伝道的に位置づけ直すことであった。それは説教・聖餐・祈りを、伝道という視点から再定義することで、生き活きとした礼拝、魅力のある礼拝、力が与えられる礼拝を目指した実直な取り組みであった。原点回帰とも言えるこの宣言は、100 年に向けた折り返し地点である 50 周年の、再スタートの足場を固めたと言ってよいだろう。

50 周年記念宣言が編まれた背景には、二つの事柄が横たわっていたと思われる。一つは、全体的に教勢・伝道が停滞し、かつてのような堅実な勢いのようなものが失われていたという問題である。今一つは、中会会議にも表れた職制や聖書理解の問題、各個教会に生じた問題とその対応への不協和音等で苦悩したことであった。

このような困難の中で中部中会は、改革派教会として堅実な神学と教会形成の土台として一致できる信仰の伝統に目を向けたのであった。50 周年宣言は、この一致の絆を確認し、同時に教会の生命があふれ出す源として主日礼拝式があるという共通基盤を確かめた。こうして、充実した礼拝の要件として神の言葉の説教の充実、聖礼典の正しい受領という道を確認したのであって、それはまさに、危機に瀕するときの原点を確認したのである。

###### (2) 50 周年記念宣言の実りについての評価・反省

説教と聖礼典に立ち帰った 50 周年記念宣言によって実際、宣言に基づいて一つの礼拝プログラムを吟味し、それぞれの教会の場で、より伝道的な礼拝改革に挑戦してきた教会も多くあろうし、そのような教会では、御言葉を聴くことの喜び、聖餐に与る祝福、礼拝に集える感謝などの多くの実りが与えられたことと思われる。この

点は評価できるであろう。

一方、礼拝への集中は、各個教会が内向きになる傾向を強くしたのではないだろうか。それぞれの教会が個別のことには力を尽くすが、他の教会への関心が希薄になったことで、中会全体から言うと、力がある教会や勢いのある教会はよいが、弱さを覚えている教会や問題を抱えた教会は、より困難や孤立を覚えることが多かったと思われる。具体的な現れとして、教会の伝道所への種別変更や伝道所の閉鎖、配慮委員会の設置を必要とする案件等、様々な中会的問題の発生という点が挙げられるだろう。さらに、共に学び合い、祈り合い、励まし合うといった隣人への関心と共同の機会が減ることで、結果的に各個教会の力も失われていったという点もあるのではないだろうか。教会は恵みを受けることと、それを与えることの両方で成長するのである。特に、40周年記念宣言で謳われた「中会は教会である」という中会の霊的・有機的な結びつきや広がりからの視点のさらなる進展が求められている。さらに、自分たちの内側で自明のこととされている言葉のなかに立てこもり、結果的に中部中会という共同体の形成はもとより、社会からも逃避的なものとなってしまった面もあろう。

### **(3) 50周年記念宣言を生かす取り組みがなされたか**

そもそも50周年記念宣言において目指された「礼拝の生命力の回復」はどうだったのか、特に説教者においてそのための神学的な戦いがなされてきたかを省みる必要があるだろう。礼拝において説教が語られ、聖礼典が執り行われる。そこで聖霊によるキリストの臨在によって礼拝者がひれ伏し、砕かれ、そして喜びに跳ね上がるように福音に生きる信仰生活が現実のものとなる。そこでは神の国を見える教会として地上に映し出そうとする「信仰告白」、「教会政治」と「善き生活」の実を結んでいく。その点で、50周年以降の歩みは、宣言が描いたような礼拝の生命力の回復にはいたらず、むしろ現状維持が精いっぱいではなかったか。それは50周年記念宣言で謳われた礼拝論や伝道論への掘り下げが不十分なものであったからではないだろうか。その結果が、教勢の減少傾向にあらわれたとも言えるであろう。

### **(4) 中会全体にある個々の課題を扱わなかったこと**

当委員会が50周年記念宣言について検討したときに意識した問題点は、50周年の主題設定それ自体が持っている一つの課題である。それは説教・礼典に集中したために目の前にある個々の中部中会の具体的な課題について挙げ、これらについて固有の問題を論じることがなされないまま残されているということである。50周年記念宣言で描き出した中会像の実現についてはなお不十分で途上にある中で、60周年に記念事業を行うことができず、65周年になったことにも中会の課題があらわれているといわねばならない。

### **(5) 65周年の主題設定へ**

以上の視点から個々の課題を挙げていったときに導かれた主題が、掲題のとおり「福

音に根ざした、慰めの共同体としての中会の賜物と権能」である。換言すれば「中会共同体ないし教会共同体を再定義する、あるいは捉え直す」ということができるだろう。ただしそれは、50周年の主題であった説教と礼典における神学的な戦いを、これから個々の課題に取り組むときにも通底し続ける課題として、(特に説教者が)強く意識していくことが前提である。当委員会は、中部中会と諸教会、伝道所の現状について深い危機感を共有している。言い慣わされた言葉としてではなく、真実の悔い改めの恵みを与えられることを期待しつつ、個別の課題についての希望と課題を記すこととする。

## 2 教師をめぐって：教師の交わり・相互研修

### 3 日韓開拓伝道が開始された。

### 4 東日本大震災によって執事的愛の働きに新たな視点(ディアコニア)が与えられ、展開しつつある。

### 5 名古屋岩の上传道所の教会設立と、新たに教会設立を目指す伝道所が与えられている。

## 6 教会の伝道所への種別変更、伝道所の閉鎖

### 7 様々な事情により配慮委員会が複数回設置されることがあった。

## 8 回顧・現状認識から今後の課題へ

以上50周年以降の約10年を振り返ってきたが、これらを踏まえて、どのような視点で今後の課題を考えたらよいだろうか。中会の現状を省みると改革派教会としての教会形成について厳しい認識を持たざるを得ないように思われる。創立宣言や二十周年宣言で熱心に取り組みしてきた改革派教会の形、すなわち教理理解、長老主義の原則、善き生活、そうしたことが崩れてきていないだろうか。特に長老主義の原則について言うならば、「人の支配」ではなく「法の支配」(ただし教会法、キリストの(愛の)御支配を実現するために考えられたルール)が求められる。教師同士、教師と長老の関係もこの視点の中で考える必要があるだろう。

そういう中で私たちは今、いわゆる教勢は低迷し、年齢構成その他の要因を考えれば人数が少なくなっていくことを予想せざるを得ない時代にいる。それゆえにこそ、単に人数に着目した教会の見方やあり方ではなく、新しく教会共同体をどう見ていくか、どのように歩んでいくか、その捉え直しを中会として行っていくことが求められる。主イエス・キリストの福音によって立つ主の教会には、救い主なるキリストが私たちと共におられる。そこに希望がある。この希望を見つめて中部中会の現実と共に

向き合い、65周年、そして65周年以降の中部中会の歩みをつなげていきたい。

## II 今後の課題

### 1 中会の一致に向けて

昨年より教会は、思い掛けない新型コロナウイルス感染症に見舞われて、何処の教会も初めての経験をしてきた。大きな困難であるが、このような時こそ各教会は、「中会主義・長老主義」の教会形成の原点に立ち返る必要があるように思われる。当委員会は、中部中会は今危機的な状況にあると認識し心を痛めている。

新型コロナウイルス感染症の危機と教会員の高齢化などにより、献金の減少、教勢の衰退が顕著であり、これらの試練が各個教会を襲っている。いま中会内の各個教会の教師、役員、信徒も、「中会の主に在る一致」が失われているように見える。当委員会では、各個教会が今改めて中部中会の存在を覚え、中会主導でこの危機を乗り越えたいと願っている。中会が一致・協力して進まなければ、この危機を乗り越え、希望を持って新しい未来に進むことはできないだろう。中会が一致して困難を乗り越える、そのための「65周年の時」にしなければならない。

そのために中会が65周年とそれ以降に向けて取り組むべき課題を以下にいくつか挙げていくこととする。

### 2 教会と中会についての神学的な捉え直し。見直しと具体的方策を建てること。

#### (1) 教勢の停滞

#### (2) 高齢化：高齢信徒の信仰が活きる教会へ

### 3 日曜学校、青少年への信仰教育・信仰継承・伝道

### 4 中会の教育力の回復

### 5 世に仕える教会（対外的ディアコニア）

### 6 定住の牧者を欠く教会・伝道所をどう支えるか。

### 7 これらを踏まえた新しい教会像の必要性

### 8 中会内の各教会・伝道所相互の支え合う聖徒の交わりについて、神学的仕組みを考え構築すること。

#### (1) より小さな地域ごとの支援・協力・交流の体制を考えていく。

#### (2) 地区を超えて伝道の賜物を分かち合う

#### (3) オンラインによる交わりの可能性と限界

#### (4) 65周年以降に会堂建築が必要な教会・伝道所への支援

### 9 日韓の今後の協力・交流について

#### 10 教師をめぐる——教師の交わり・相互訓練の強化

#### 11 コロナ禍における教会の再発見

### III おわりに

以上中会65周年に向かう課題検討の結果を述べてきた。これらは中会で行われた懇談会、アンケートをもとに委員会で検討してきたものである。多くの、そして困難が予想される課題、具体的な方策を模索しなければならないものの現時点でそれが分からないものもある。しかしこのような課題が与えられていること自体、未完成の教会が完成に向かう途上を旅していることのあるしでもある。中部中会は主の教会として、復活の主イエス・キリストの御臨在をいただきながら歩んでいる。教会の頭なるキリストが統治してくださっていることを信頼しながら諸課題に取り組むとき、私たちは課題を恵みとして受け止めつつ進むことができるはずである。聖霊なる神は私たちの知恵と力を超えて思いもよらない働きへと私たちを導いてくださるだろう。

私たちはどこを向いて進めばよいのかわからないのではない。創立宣言をはじめとする改革派諸宣言において進むべき道は示されている。建て上げるべき教会の設計図は与えられているのである。私たちはその熱心と確信を受け継ぐ者たちである。中会の危機に際してどこに救いを求めるか？それは創立宣言で謳われているとおり、「イエス・キリストの宗教（即ち改革派のキリスト教）」であり、「世界の希望はカルヴィン主義の神にあり」である。今こそその熱心を主によって燃え立たせていただかなければならない。今なお実現途上の改革派教会の形成こそ、神と隣人（世）への最高の奉仕である。主に向かって頭を高く上げ、中会が教会であることを改めて認識して65周年に向かって歩みを共にしたい。



発行日 2022年10月13日

発行者 日本キリスト改革派教会中部中会  
信徒研修会委員会